
[東方] 解雇通知 ~元メイドの逆襲~

御琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「東方」 解雇通知 ～元メイドの逆襲～

【Nコード】

N7525X

【作者名】

御琴

【あらすじ】

主人公、紅魔館の瀟洒で完璧なレミア・スカーレットの従者、十六夜咲夜は突然解雇をされ、命からがらにとりに助けられる。必要な物が自分の身の周囲からなくなり、地位も忠誠も全てが無くなるも便利屋のようなことをしながら自身が解雇された真相を探る。

CASE 1 (前書き)

完全に某スパイドラマのパロディです。

内容は完全オリジナルストーリーですが、元が元なので知っている方であれば楽しめると思います。わからない方でも楽しめるように書いているので多分大丈夫です。

CASE 1

1 .

メイドというあまりに希少な仕事は一旦就けば、後はもう忠誠心次第でなんとかなる。後は、問題事や私情を持ち込まなければ最高の衣食住を手に入れられる。本来の私の様にね。

だが、失敗が積み重なればモチロンの事、忠誠心どころか、一気にポイと捨てられるのがこの仕事の一番つらい所。私は完璧だったかもしれないけど。

しかし、それよりももっと恐ろしいところは、ポイと捨てられた『後』である。メイドは一見完璧な人間のように見えて、仕事をクビにされた後でも容易く新しい仕事が見つかると思うかもしれないだろうがそれは大きな間違いである。

メイドという仕事は『上』、つまり主人が居なければ成り立たない。主人の居ないメイドなんてただの仮装した人間に何ら変わりはない。しかも長い間主人にこき使われたメイドや執事だったらなおさらもつと酷いことになる。何していいかわからず、ただ、放浪するだけ。

分別がつく人間だったら直ぐにでも次に進もうと努力するが、この世界にそんな人間は、

「いないわよ...」

ポツツとつぶやく。

「何がだい？あー、というかそもそも安静にしてたほうがいいと思

うけどなあ、さっきまで栄養失調でぶっ倒れてたんだし、やっと意識が戻ったのにまた消すなんて勘弁してくれよぉー」

泣き言上げるが、怪我の手当の上に、食べ物まで面倒みてくれたのはどこの誰でしょうかね。

「いいえ、それにはとても感謝しているけど、今は悠長にそんなことを考えている暇はないのよ、にとり」

この子の名前はにとり、私の命の恩人。

気づけば全身重症だった私を、回復するまで看病した心優しき妖怪ね。

意識が朦朧とした中でも自分に何かが起きていると判断できていなければならぬのが一流のメイド。

でなければ、主人を護衛することなんてできやしないし、務まりもしない。

私が全身重症だった原因は不思議とわからなかった。

突然レミリアお嬢様の別れの声が聞こえた途端に、視界が真っ暗になり、気づけばこの通り。

気絶しそうな程の痛みの中で、にとりが現れ間一髪でなんとか助かった。

「そういえばあの時は、痛みの所為で聞けなかったのだけれど。なぜあそこで私を自分自身で何とかしようと思ったのかしら？永遠亭にでも連れていけば直ぐなのに、わざわざそんな手間まで…？」

そう聞くと、にとりはビクウと声を上げ、機械をいじっていた手が急に止まった。

「そ、それは…」

「もしかして、紅魔館のメイドである私に恩を売って………」

そこまで言うと、私ではなく、にとりが気絶していた。
よほど当てられたことにショックだったのね。

一流のメイドは言葉遣いも話術も一流でなければならぬ。でなければお客や、ましてや主人に安心をさせることはできないから。喋るタイミング、表す態度で、場の選択肢も増えたり、減ったり。とにかく忙しい。

笑顔で、忠実、そして上品におもてなし。これがメイドの象徴。この象徴を崩さないために、細心の注意を払い、心掛け、実行に移すのがまた、メイド。

それよりもなぜ自分が解雇されたのか、どうしても突き止めたかった。唐突すぎるのだ。

納得ができないという感情のほうが大きかった。

にとりにはまだ話してはいないが、私は紅魔館をクビになった。だから恩なんて売っても買うことなんてできないからだ。

なにか理由があつての事情なのだろうか。それならばメイドである自分だつたら知っているはずなのに。

「心当たりなんて何も無い……」

あまりの無能さに憤りを感じ、声が口から出てしまった。

他人に聞こえる程の声だったが、生憎レンチを持ったにとりは真っ白になっていて、唸り声を上げ、白目を向いていた。

ここ最近で、お嬢様の機嫌を損ねるようなことをしたのか今までの記憶を巡る。そして作った料理から歩いた歩数までも全て鮮明に

思い出す。

「してないじゃない……なんで？」

ちなみに、作った料理の調味料は数えた限りでは1464本で、歩いた歩数は557882歩だった。その内の調味料2本は質が悪かったので、博麗の巫女に供え物として渡した。さすがに勘が鋭い巫女だけはある、開口一番に腐ってるんじゃないでしょうね？と疑ってきた。間違っでは居ないが。

そこで私は笑顔で、調味料は腐らないと釘を打っておいた。生まれて初めて凄まじくどうでもいい嘘を突く瞬間だったと思う。

ということとはつまり、私は悪くない。きっとそうだ、いやそうであるに違いない。という結論に至った。

だが、私に解雇を告げるお嬢様の声はどこか、悲しげな震え方をしていたと思い出す。致し方なかったとも感じた。なんていうかお嬢様らしくなかった。

こうなれば直接紅魔館に戻るしかない。

しかし、戻ったら戻ったでどうなるかわからなかった。もしかしたらまた全身重症になって気絶するかもしれない。

では一体どうすればと考えたが……

「うーん……うがつ！ここは？ハッ！なんだ、私のテリトリーじゃないか。脅かすなよ」

気絶から回復したのか、なにやら一人でコントを繰り広げる妖怪が目の前にいた。しかも、かなりの技術（二つの意味の）を持った。

長年こき使われて来たメイドは他人と仲良く関わるのを苦手とする。だがそれは、現在進行形で働いている者が多く、そうでない者

は一気に呪縛から解放されているので心をさらけ出すのが殆ど。

自分から私情を持ちかけようとしな。仕事での話ならいくらでも話すが、プライベートになると一切無言なのが大体。

でもよく考えてみれば私はもうメイドじゃない。だが、メイドに戻りたがっている。

そんな時は、どうするか。

もちろん、私情を挟んで仕事の話を振る。

「ねえ、にとり。あなた、確か透明になれる衣服をお持ちと聞いたのだけれど？」

「あ？そうだけど」

一人壮絶コントを中断して、素っ気ない返事をする。

「あたしは機械いじりが好きで色々作ってるんだよ！見て見なよこれ、何だと思う？」

「さあ？針が2本突いた鉄砲…？でしょうか」

「チッチー…これはそんなものじゃないさ。これはね…ティザー銃と言って、この引き金を引くと流電した針が飛んでいくんだよ。そして当たった奴は多分だけど…鬼以外なら気絶する！」

「あらすい」

にとりの調子に合わせて相槌を打つ、

このままではあまり本題に持っていきそうにもないのでさっさと急かす。

「じゃあ、後でそのティザー銃でしたっけ？使いますから、話を聞いてください」

「え、マジ！？いいよッ！」

「透明になれる服があると聞いたのですが？」

台詞の最後まで言った途端に。

「あるよ、ホイ。一着余ってたから貸してあげるよ。ちゃんと返してね。あとーサイズとかは完全に私用だから少し小さいかもしれないけど、まあ大丈夫でしょ」

コートの様な、又はジャケットのような衣服を投げつけると直ぐに手元の機械をカチャカチャといじり始めた。どれだけいじるの好きなんだろう。

どうやらこのスイッチを押すと起動する仕組みになっているらしい。それにしても完璧に透明化している。

もし、私が悪人であればこれを悪事かなにかに利用するだろう。それだけ、完璧だった。

そんなことよりも一刻も早く紅魔館へ向かわなければならなかった。

急がば回れというが、急がなくても結局は紅魔館に向かうのだから意味が無い。

なにか嫌な気がする。

そう焦る気持ちを胸に、紅魔館へ駆け出した。

メイドの心得という物は実は無い。

主人を持った忠実なメイドは自分なりの考えで臨機応変、即時対応でその主人の性格、性癖、行動、癖、口調、運動能力、判断を理解し、合わせる。

いつどんな命令にも合わせられ、不都合がないようにもてなすのが真の心得というものだ。

でもなぜ私はここに居るんだろう。

CASE 1 (後書き)

ちょっと短いかもしれませんがCASE3からは増えると思います。
小説のアドバイスや、意見お待ちしております。

CASE 2

2 .

事実は小説より奇なり、本当、よく言ったものだ。

大体、小説になる材料がなければ小説そのものは書けない。言わば小説は材料をたくさん詰め込んだ一つの箱、ということになる。

存在しないものは箱には入らない。言い換えれば、事実の塊。

夢や、希望、理想なんて結局は『元』が無ければ考える動作に移るだつてことには無理がある。0から1に進むには進むための手順（手を加えること）が必要と思えばいい。まとめると機械みたいなもの。

私の言いたいことはつまり。

事実は『材料』で小説は『過去の事実のまとめ』、つてことね。

私をどんな理由で解雇したかどうかは理解に苦しむけど、これだけは納得が行かない。

自分の一生をメイドとして主人に仕えると誓ったのは自分であり、それを心優しく決めたのは主人でもあるのだ。

毎日レミリアお嬢様の笑顔が見たかったのに、まさかこんなのでお別れになるなんて。

きっと何か原因があるはず。

と、咲夜が悩みに悩んでいた最中だつた。

「……………笑顔…？」

ふと、自分が喋ったこんな台詞を思い出した。

傍から見れば恥ずかしいほどこの上ない台詞だったとも見て取れるこの台詞。

何かが気に掛かった。

…ここ最近レミリアお嬢様の笑顔を見ていない。

とは言え、今はお嬢様と呼んで良いのかどうかすら怪しい立場。難しい。

普段はフラン様や、美鈴、パチュリー様の談話を聞いてはクスクスと楽しげに笑っていたというのだが。

思考しながら早歩き。向かうは紅魔館。

そして、私の唯一の居場所。

衣服はメイドのユニフォームのままだが、その上にとりから貸してもらった光学迷彩を羽織っている。

まだ作動はさせてはいない。にとりによると、起動し続ければ次第に迷彩効果が薄くなるとのこと。しかし、静電気対応の小型蓄電池を内蔵しているらしく冬場に起動して止まらずに動いているとほぼ永久的に完璧な迷彩効果を維持できると言う。止まらずに動き続けられるわけ無いでしょうに。

懐中時計を親指で押して開き、時間を見る。

昼過ぎだ。本当ならお嬢様の昼食の時間だった。

(通知を言い渡され、気絶したのは昨日の夕方頃。で、気がついたのは今日の朝頃…つまりこの間にお嬢様は何かをしていたと見て取れるし、私が丸一日ダウンしたと分かる)

メイドであった時は様々な人々が使った獣道を通ってあらゆる所

に行き来していたが。こんな状況だ。森の中を通るしか方法は無い。
なぜなら、

（さつきから人の気配がする。気にし過ぎると道に迷ってしまっけ
ど、にとりにもらったコレがある。でも妙ね、同じ気配が同じ道路
を7回も行ったり来たりしている。普通ならこんな行動を取るの
は、なにか企んでいる者しかいない）

太陽が直接地上に照りつける真昼の気温は異常に高い。直接日射
光を遮ってくれる木々がありながらも結局はジメジメした湿気に変
わって襲いかかってくる。

なかなか汗が出ず、体はベタついてイライラ。体温は上がり風邪
になったかのような気だるさが思考能力に止めを刺そうとしてくる。
おまけに、ジャングル同然のこの場所に適している服装は普通、
長袖長ズボンが常識。それをスカートで素足丸見えのメイドモード
でガツガツと進んでいるんだから尚更おかしい。

そんな中、直接日光を浴びる開けた道を7回も往復するバカは一
体何処の馬の骨だろうか。

だが、今はそれどころではない。

（あいつに見られているわ……………）

メイドは主人に仕えるただの従者である。どこかの世紀末救世主
だとか、ましてや超A級狙撃手でもない。あくまで、気配りが得意
な『従者』である。いつどんな時でも主人よりも先に手を回し、も
てなすのが従者の使命。遅延は恥ということ。

メイドであるが故に周りに気配りしすぎて他人まで気を遣う哀れ
な職業病がまさかこんなところで役に立つとは誰も思わなかった。

相手は確実にこちらのことを監視している見知らぬ人間だと判断

した。

（しかも、尾行がかなり上手いようね……一体どこの人間かしら……
わからないならちよつとばかりからかってみようかしらね）

相手もこちらの正体と位置を正確に把握していない。だが、にとりの装備を使ってこちらの位置を完璧に消して、迷惑な子犬にサブライズ。

幸い、武器であるナイフは

「え？」

手を左足太ももに巻いたホルスターに手を掛けると……

「なによ……これ……」

何か大きく、分厚い金属の塊に手が引つかかる。それはナイフ、ではなく、

「……鉄砲？」

にとりから貰ったテイザー銃、は右太もものホルスターにある。が、これは少し違う。

大きさも一回り大きく、先の方は四角いが角が無い。しかも銃身は縦になっているが、親指の上にレバーの様な物があり、それを上げると、銃身が縦と横に回転する仕組みになっている。

しかも、銃把グリッパの中心には『偉大なるエンジンア、Isaac へ』と小さく削られていた。

「誰よ…」

しかし、エンジニア云々と言うことは、これは武器では無く工具なのであると言うこと。

「あの河童、私が気絶している間にナイフと工具を間違えたのね…」

むしろ、工具とナイフの重量の差に気がつかないのも変だがあの河童のことだ。特殊な素材でも使われて軽量化されているのだろうと納得した。

現に、銃本体のあちらこちらには、ニトリウム合金と印字されているのが見えた。どんな合金だ。

仕方なく木の裏に隠れ、どこに奴が居るのか確認する。服をなるべく汚さないように、ゆっくりと距離を縮めていく。

(面倒ね、時間が惜しいのよ)

直後に森の木の影に隠れていたはずの咲夜が、一瞬にして消え去った。

ガッ!!

と腕で、強く離さないように迷惑な人間を後ろから拘束する。

本来のメイドは兵士でもなんでもない。家事が得意の一般人だ。だからもちろん戦ったり、心理戦を繰り広げるようなことはしない。それをするのはアニメか、漫画か。

アニメだとスカート履いたまま日本刀を振り回すのが一種の楽しみ要素だが、実戦では糞ほどに何の役にも立たない。まあ、意表をつけるかもしれないが。

もし白兵戦での戦闘に遭遇した際、真っ先に思い浮かべるのは1対1の肉のぶつかり合い。

これを回避して相手をねじ伏せるには、こちらが優位な状況をアピールすることが何よりの方法。

先手を打って、後ろから不意打ち、そして、ハツタリかまして脅す。

「動かないでッ！！さあ、力を抜きなさいッ！！…動けばどうなるかしらッ！？今ここでクビが飛ぶわよッ！！」

右手で首を引きこむように締め、そのまましゃがみ込む。

これで相手を足で抵抗できなくさせると同時に、左手の工具で相手の後頭部を殴る。

次に、首に突きつけてさあ尋問やら何やらご自由にできる。

「クツソオツ！いつの間にツツ！？」

日差しが容赦無いこの場所で、咲夜は様々な可能性を見出した。

相手は男、身長は大体咲夜の頭一個分高い。

衣服は人里で普及している古臭いものと変わらず。

所持品はなし。だが、強く何かを握っていた手を殴り、放すと通信用の機械と思わしき道具が見つかる。

「これは…少しの間だけど、貸してもらおうわね」

直ぐ様地面に転がった通信機を拾い上げて、没収。
男は殴られた痛みで、手も足も出ない。
痛みは最大の抑止力とはまさにそうだった。

さて、身体調査は終わりココからが本番。

尋問の時間だ。

ただ尋問するだけでは大体の気が強い者は話を逸らすか、嘘をついてその場をやり過ごす。

口が上手い奴はさっさと本音をぶちまけて自分が助かるうとする。さらに上手い奴は、終始嘘偽りの物語で尋問者を惑わす。

逆に中途半端に気が弱い奴は、どもりまくって余計話がわからなくなるがそこは我慢。

そして気が弱いのは言わずもがな。脅したら自滅しまくって逃げる。尋問者としてはこちらの方が嬉しい限りだが、世の中そんなに甘くはない。

「ハッ………！！殺るんだったらさっさと殺ってくれも良いんだぜツ！？オラア、早くしろよツ！………これで家族が裕福になるんだったら…俺は……」

そうきたか。

稀に、悪党にも悪党なりの正義というやつがある。

丸くすると、私のことである。多分ちよつと違っけど。

コイツの場合は家族が人質になっているらしい。

しかし、演技ということもあり、油断はできない。だったらボロ出すまで脅すしか無い。

話はそれから。

「ねえ…貴方。幸い、ここは誰も通らない獣道………しかも、森ざわつきのお陰で声も響かない」

「…な、なに言い出しやがんだ、テ、テメエツ!？」

首を拘束していた右手をゆっくりと放す。

「私のお気に入りなのよ、此処がね。……自然の音を聞いていつも心が安らぐの……嗚呼!ここに貴方が踏み込んでから森が迷惑しているそうよ……聞いてご覧なさい。……っほら!こerse……コロセ、殺せ、殺せ殺せ殺せ……って。聞こえるでしょう?今にも早く貴方に消えて欲しいですって」

演劇のオーディションにも一発で受かりそうな迫真の演技。

工具を男の額に向けて、ゆっくりと一歩ずつ、一歩ずつ、近づく。男は今にも泣きそうな目で震え上がっている。

「お、おい……!なあ!お、落ち着け……な?こつち来んなツ!そのデカイのをしまえよ頼むからアッ!うわっ。クソツ、こんなキチガイ相手にするハメになるんだったらスカーレットファミリーなんかに入らなきゃ良かったぜ、チクショオ……」

「ならばさっさとここから出ていきなさいッ!……!」

と、構えた左手の工具銃から閃光。

空気を裂いて飛ぶ縦の光が男の股下を掠めて地面に着弾。

普通の鉄砲ならば土の地面に着弾すると、弾が土をえぐり出すように進むが、この工具銃の弾は土をえぐるかと思いきや、土がどろどろの溶岩の様になったいた。

つまり、人間が当たっていたら間違いなく胴体なんて容易に両断できてしまうということ。

というか、こんな恐ろしいものを目の当たりにすれば、どんなに

CASE3 (前書き)

ちよつと文が増えてきました。
もっとなんばるぞー！

CASE 3

3 .

『生きるとは呼吸することではない。行動することだ』
昔の教育思想家が放った言葉がグルグルと頭の中で泳ぎ回るこ
数十回。

呼吸するどころか人生の半分以上、行動しかしていないこの一生
はどうなる？と、思考が別の方向へと向かってしまった元メイ
ド、もとい十六夜咲夜はさっさと次の目的を思案する。

ヨレヨレの全力疾走で人里へ逃げる男はいつの間にか消えていて。
一般人が追いかけても追いつけるような距離には居なかった。
思考に耽って時間を潰していた訳ではなくただ単に男の逃げ方が
少し上手いだけの話だった。

当然、尾行が上手い人間は逃げるのも上手くないといけない。
追いかける技術はあるのに、逃げる技術が無いのも可笑しな話。
と言っても、逃げる技術、逃走術というのは突き詰めれば『見せ
かけ』。

逃げた先のゴールが「あちら」にあるとして、「そっち」に逃げ
たように見せかけ、本来の「あちら」に戻るといった感じだろうか。
そして何よりも相手に悟られないように行動するのが一番大事だ。
本気で逃げれば相手だって本気で追いかける。それが尾行とはま
た違ったところ。

しかし、逃げるにしたって人によっては状況と環境には大きく影
響を受ける。

一般的には広く大雑把な地形で逃げて丸見えなので速さが勝負

になる。頭脳戦なんて発想は捨ててしまえ。

だが、人口増加に伴う過密、人工建造物の増加で巨大迷路となった現代では逃げる側が圧倒的に有利になったし、追いかける側も何処で追い詰めれば仕留められるか計算するようになってより一層お互いが深く戦略を練られてまあ、なにより。

だからコンクリートジャングルは敵にも味方にも変身する中立した厄介者。

その代わり、天然のジャングルはどちらにも味方しない。何処まで逃げられるかが問題になる。

結局、逃げるのに必要な最終的要素は体力。体力がなければ追手を撒くことはできない。

力がモノを言う幻想郷では体力も重要な一つのステータス。

勿論、体力がどんなに有り余っても咲夜の前では紙屑同然以外の何者でもないという事。だって時間を止めてしまえば、逃げるどころか、考えることだってさえ止まってしまうこの能力の前では全てが筒抜けなのだから。

ということとは、逃げる技術の前に、追う相手がどんなのなのかわあらかじめ情報として学習しなければならぬ。

目を瞑り、少しの間が空く。

幻想郷で轟く全ての音が無に変わると、宝石の様に両目を赤く輝かせる。

懐中時計の針は進まなくなった。透明の膜が咲夜を中心に風船のように膨れあがっていく。その膜の中に入ったものは全て物理法則関係なく時間が停止する。下に向かって螺旋を描き落ちる葉っぱだって、ゆっくりと流れる雲ですらもそこで完全に固まる。

本人の咲夜以外は。

そこで光学迷彩の起動端末の電源に手を触れる。

薄く、柔らかく曲げられてタッチできる画面の中に様々な機能紹介、その下に実行と言ったパネルが次々と表示された。

その中の「通常機能覧」と表記されたパネルに指で触れると、ピロリン

という可愛らしい効果音。

表記が更新されると、新しい画面に変わる。

「オプティカルカモフラージュ」というパネルが表記された。それを更に指でタッチ。

『クロークエンゲージ……ッガッホゴッホオツ!!』

と女性の機械音声と思しき響きが耳に入る。

どう聞いてもにとりの声を加工しただけの物だったし、録音したタイミングが悪かったのが盛大に咳をする声までしつかりと入っていた。

しかも聞こえづらいが小声で、

『ああー…くそ、やっぱり無理だー』

毎回この機能を起動する度にコレを聞かなければならぬらしい。

一応説明するが咲夜はどうでもいい場所で非常に細かい性格を持っている。より端的に言うとな咲夜は他人から貰い受けた服を家に置くやいなやポケットの中身を探る派という事だ。

迷彩服には胸ポケット以外にも内ポケットやその他、大小様々なポケットがある。

咲夜が探るようにポケットに手を突っ込むと濡れた紙屑や、四角い鉄の破片が入っていることに気づく。

無論、咲夜はそれを廃棄物、すなわちゴミと認識して無造作に草むらへと捨てた。

一応はただそれだけである。

そんな事はさて置いて、光学迷彩を起動すると直後に自分の姿が見えなくなった。本当に透明になった。

映画やゲームの様に、輪郭は最低限視認できるという安直な考えがあつたが、そんな手抜き装置ではなかつたようだ。

自分の姿を認識できない自分に改めて新鮮さを感じる。

(スカートの中也見えないんだけど…一体どういう原理……………?)

ちなみに光学迷彩の扱い方は右内ポケットに入っていた説明書モドキを呼んでマスター。

基本的に今使う機能がこれだけなので、他の意味不明な機能は全く要らない。

「ハイドロカモフラージュ」なんていつ何処で使うのだろうか…

準備が終わつた所で早速男の行方を追う。

時間が止まっているから疲れ果てるまで自由に探せる。むしろ疲れ果てた後に休んでもまだまだ時間が余るほどだった。

(さーて、男はそこに走っていったようね…)

念のために、もう一回。

尾行が一般人よりも上手い奴は逃走術も一般人よりは上手い。

一発ですんなりと尾行に気づく咲夜が異常なだけで、そこらに居るアホであつたら普通は気づくどころか意識すらしない。

毎朝毎晩、胃痛覚悟で主人にどうやって尽くすかと考えるメイドだからできる至難の業だった。ただそれだけ。

逃がっている標的を追跡するのは今も昔も変わらずとても難しい。早く逃げれて、痕跡も残さず、行動パターンもわからない奴が相手だと、もう駄目。

逆だとして。逃げるのが遅くて、痕跡残しまくりで、行動パターン丸分かりな奴が相手だったらそれはただ単に子供相手に追いかけてっこしてるだけ。

酒の肴にもならない。

しかし、男は足跡を残してしまっていた。

大きい体格が災いしたのか、地面にくつきりと大きな足跡が作られてしまったようだ。

完全に酒の肴にもならない結末に向かっている。行動パターンまる分かりどころの騒ぎではない。

もしかするとこの男、尾行技術も逃走技術も実は中途半端なのではないのだろうか？

というより素人と考えたほうが妥当だった。

適当な書物で齧っただけの技法を実践で使うとは全くいい度胸をしている。

(まあ、最初から何もかもが中途半端な奴だったようだし…どこぞの庭師さんとまではいかないけど)

男の逃げるルートは確かに察知されにくく、巧く重ねて複雑化されている。ように見えなくもない。

しかし、肝心の大きな足跡は残ったまま。

子供ですらこれに沿って歩いていけば一発で男の隠れ家に到着できる。

というわけで、そのまま素直に目立っている足跡に沿って道を進んだ。

ジメジメした森の中を彷徨うろたくにしても、逃げる阿呆を追跡するにしてもやっぱりこの服では目立ちすぎる。人里に出れば一発で紅魔館のメイドだと見た目で正体を知られてしまう。

どこかで、身分を覆い隠せるようなものが必要だと、冷静に考えた。

エプロンの結び目に手をかけて解ほどき、折り畳んでスカートのポケットに捻じ込む。

頭のカチューシャはとりあえず同じポケットにはもう入らなそうだったので捨てた。きつと誰かしら拾ってくれるだろう。

三つ編みされた髪を結んでいる二つのリボンは一つに束ねれば長いリボンになるので髪型をポニーテールに変えて固定に使った。

正々堂々と意見を述べ合う様な間柄でもないなら、こつそりと忍び込んで会話を盗聴することをオススメする。

情報なしに下手な行動は避けた方が自分の安全の為でもあるし、何よりもバレなければこれからの活動で有利になるかもしれないから。

相手は確実に咲夜を目の上の瘤と見なしている筈だ。でなければ監視をつけるような真似は普通、しない。

(本来ならば私は再起不能という事になっている……。でも今こうして立っている事自体が相手にとっては少々驚きではある様子ね…)

あれこれ考えている内に人里に着いた。時が止まっているので里の人間の動きは全て不自然な形のままで停止していた。

今にも運んでいる物をぶちまけようとしている者、酒を手に振り回しているであろう者。二人、手をつないだまま長椅子で寝ている者。

多様で不思議な形で止まっている。

その間に男を見つげ出さなければならぬ。

様々な人間が行き交う人里では足跡作戦なんてもう役に立たない。だが、男はまだアジトにはたどり着いてはいないはずだ。

だったらこの時間が止まった世界なら可能。

それは、

(……さて、片っ端から探すかしら)

メイドは地道な仕事が好き。でなければこんな面倒臭くてかつたるい職業には務まらない。

主人の愚痴を聞くことから世話、炊事、洗濯、掃除、挙句には人里の人間とのゴミ捨て場コミュニケーションまでとりあえずなんでもやっちゃおう。

それがメイド。

すべてが止まった世界で、地道に民家一つずつ見まわる。

まるで、老人介護の見回り人だ。

一軒一軒風漬しに調べていくのは流石に体力の無駄だがこうでもしないと見つからないのが今の現状。

気が滅入るような事でもしない限り、真相は闇のままになってしまおう。

人里の半分程まで民家を見まわったが男の姿は一切見当たらず、どうでもいい丁半博打が開かれている宿屋を見つけただけで、直ぐにその場を離れた。因みにサイの出目は『四』と『三』、『シソウの半』と見えていたが男達の唇の動きを読むからに、「丁」と開く者が数人居た。

そんな宿を離れて右側の小道を通り過ぎた矢先だった。

(……………あ、見つけた)

意外とあっさりだった。

男は片手を後頭部に押さえて歩く形で路地裏に固まっていた。

そこですかさず能力を中断。

止まっていた世界は一気に生を取り戻すように動き出した。

大通りからはガヤガヤと人々の語り合う声が聞こえる。

一方で男は後頭部を痛そうに押さえて路地裏を突き進んで行く。

路地裏のような狭く、動きづらい道では身を隠すポイントに困る。そういう時はどうするか。

屋根の上に登れば、多少感づかれることは無くなるがそれは高い建物でなければいけない。この時代の民家は大体が背の低い建物ばかりなので登って走った瞬間板の軋む音で見つかる。悪くて足場が抜けて一家団欒真っ最中の家庭へと邪魔することになる。

だったら、まずは標的が背後を気にしているかどうかに注目。

この様な狭い道では他に見るような物はないので、聞き耳を後ろに立てているはず。それか首を後ろに回してキョロキョロ拳動不審に見回す。

(焦っているのかしら……………？後ろを気にしていないわ)

それでも、背後について行けば足音や気配で気づかれてしまう危険性がある。

だったら相手が角を曲がるまで遠目で見ればいい。

左か、右か。どちらかの角に曲がったら急いで追いかけてまた遠目で見る。その繰り返し。

しかし、男は小道の角を曲がらずそこで止まった。

(……………ッ!!?まさか気づかれた!?)

と思つたら、そのまま咲夜から見て右の建物に入った。
建物をは倉のような大きな物置であつた。

4 .

にとりは一人細々と目の前のガラクタを分解してまた組み直すといった感じで開発を行っていた。それが彼女の趣味であり、生き甲斐でもあつた。

工具と作られた機械しか飾り物が無い殺風景(?)な小屋で一人暮らし。それ以外の置物といえば寝床と作業台しかなかった。

無表情で作業を続けていたにとりだつたのだが、手に持ったラジオペンチをポイツと台に放り投げると、脱力して大きな溜息を吐き、それと同時に嘆く。

「はぁーつまんねーなー。ガラクタ遊びつーまーんーねーなー」

どうやら生き甲斐ではなかつた。

わざとらしく大声で退屈への不満をぶちまける。

「すげえ超つまんねー。咲夜とか何処へ何しに行つたし。ふざけー、

ちよーふざけー。恩売るつもりだったのにバレちゃってんじゃん。私ただの命の恩人になっちゃってんじゃん。最終的に気も遣われないし」

続けるように。

「恩売って紅魔館に商業展開するつもりだったのになー。んでそしたらサクツちーの奴、『もしかして、紅魔館のメイドである私に恩を売って…………』 つじゃねえーよ！！まあそうなだけだよさ！」

椅子に座りながら手をバタバタ動かしてガクツと機械人形のようにショートした。

「そっぴやなんでサクツちーの奴、なんで道端に倒れてたんだろ…………。スペルカードバトルにしては異常に重体だったし…………。あ、それを治療しちゃう私って医者才能あるかもッ！」

どうしてこうなった。だが、コレも含めて冗談だったらしく。本格的な話に戻すとにとりは今、咲夜にもう一度会おうとしていた。

「私の光学迷彩借りて何するつもりなんだ？大体、サクツちーにナイフと間違えて私のプラズマカタール渡しちゃったよーやべーよー完璧に怒ってるはず…………」

座っている状態から台の下のある引き出しから咲夜のナイフがびっしり装填されたホルスターを取り出した。それと一緒に手のひらサイズの受信機を取り出す。

(…………面倒だから、直接会いに行こう…………。居場所は迷彩のポケットに入ってるGPS発信機で分かるんだし…………)

どうしても自分の所持品を紛失したくない場合はそこらへんで売ってる小型のGPS発信機を適当に仕込むという方法がベスト。本当に失くしてしまったら、受信機を取り出して、ボタンひとつ押すだけで後は表示され続ける地図座標に従って進めばいい。

すると不思議なことに、目の前に失くなった物が。という展開も。ちなみに幻想郷ではそんな高レベルの技術を有しているのは河童という種族だけだが、このGPS発信機や受信機は設計方法はとりのみ知っている完全独自の傑作作品だ。

そんなこんなで、GPS受信機に表示される座標のままに森を突き進む河童ことにとりだったが、当の本人は友達の家遊びに行く感覚で事態を軽く見ていたようだった。

(ほー、結構近いなあー。………ってかマークが動いてない…? まあいつか!直ぐ見つけられそうだし!)

だが。

現実には甘くなかった。甘くなかったのだ。

(アツレレえー！！！? ツツ!!?!? 変だなあ、信号はここから出てるんだけどなあー！！！?!? え、嘘だよねっ!?)

でもそこは見渡すかぎり森、森、森、前後左右『森』で、自分の小屋からさほど離れていない所だった。まさに地元。

慌てふためき、そこから中駆けまわるも咲夜の『咲』の字も見当たらない。

地中に埋まっているのではないのかと、凄まじくどうでもいい好奇心が生まれたが、そんな事は流石にありはしなかった。

なぜなら、

バキリと、なにか飴を口の中で砕く様な音が足元から響く。それに呼応するかのようにGPSの信号も途絶えた。

「うわぁッ!」

驚きの声を上げてしまう。

恐る恐る自分の足を退かし、踏みつけてしまった物に目を凝らしてよく見ると、

(私お手製の、GPS発信機がッ

!!!?……なぜ?)

自慢の機械が無惨に粉々になったザマを観て愕然とする。

というより、トドメを刺したのは紛れも無いにとり本人であるが、バラバラに朽ち果てた発信機の隣に落ちている紙屑を拾い上げた、

(ああ、ゴミか何かと思って捨てたのかねえ……)

見た目からして『ゴミのようなもの』を熱心に蒐集し、ガラクタを作っているにとりが悪いと言えば悪かったが、ここまでは全部にとり本人がやってきたことである。

当然責める相手は居ないし、自己責任。

見た目大柄。そこらへんのチンピラと比べると一目瞭然の筋肉の量。まさにリーダー格とも言える風貌を持つ男…。

がヘナヘナと建物の中に入っていき、ヘナヘナと誰かと話しているようだった。

それも一人ではなく複数人居るようで、会話の音を拾うことは容易い。

適当に耳を壁につけてるだけで、会話内容が耳へと入ってくる。

「…！た、大将ツ！！大変です大将ツ！監視対象に気付かれてしまいました！！！」

「どうやって気づかれたんだ？」

低く威厳のある声だ。ヘナヘナした男とは大違い。

「ずっと目標には張り付いていました！そしたら突然後ろに現れやがったんです！俺にも何がどうなってるんだか…」

「お前の頭が何がどうなっているのだ。まあそこは大丈夫であろう。想定範囲内だから問題はない。しかし…監視されているのが気づかれた以上は……………」

「そ、それについては問題ありやせんぜ、大将！どうやらアイツは紅魔館から追い出された衝撃なのか、元からなのか分かんねえですけど。キチガイみたいになって。んで、スゲー形相で追詰められて、無線機ぶん取られただけです」

「なあ…………監視されているのが気づかれた以上…どうするか分かっておろう？無線機が取られたら、お前に何が残るんだ？…つまり」

男は背中から物凄い量の冷や汗を流す。複数人居る男達が構えるように腕を組み始めた。

『ちょ… ちょっとそれは嘘でしょう、あんまりだ…… 俺を殺すんですか!?!』

『…ん? 何言っておるんだお前は? 違うわ! もう一回探し出して監視せいということじゃ! 見つけれなかったら…分かっておるよな? 家族を…』

『も、もう申し訳ありません! お願いです! それだけはご勘弁を…
…ッ!』

そう言えばあの男は家族が人質に取られているのだというのを忘れていた。

『ならば、引き続きあの紅魔館のメイドを監視し続ける。邪魔されてしまつては困るからな。なにせ、紅魔館はもう我々の物なのだから……。だが、あのメイドは少々厄介だ…』

この男…今何と言つた?

何を口にした?

我が物顔が眼前に浮かぶほどの口調で言つた男の台詞に咲夜は頭の思考が停止する。

(紅魔館が彼らのものにされ…た…?)

普通に考えてみても納得ができるわけない。

この幻想郷にて、紅魔館以上の財力を持っている組織は存在しないと言つていいはずだ。しかし、現に紅魔館がどこぞの誰かの手中に収められたという事は紅魔館を凌駕する組織があるということ。

そんな組織には心当たりがない。

正体不明の組織だ。

色々疑うのも詮索するのも、こういつ時こそ冷静を保たなければ

ならないのが一流のメイド。

いつどんな時も理不尽な主人の命令に従っていたからこんな状況ですら真面目に考える精神力がある。

無駄に慌てるよりも、落ち着いて考えた方が事態が早く進展するのだ。

(……この駄目男は仕方なく命令に従っているようね……)

どこの社会にも嫌な上司というのが必ずと言っていいほど存在する。

メイドは嫌な上司、つまり主人の命令を全て聞いて全力を尽くして奉仕しなければいけない職業だが、共同で手取り足取りお互い一緒に困難を乗り越えていかなければいけない現代社会では、嫌な上司は部下のステータスを低下させる原因になる。

だから部下は上司に媚びて機嫌取りをして、なんとか上司を遠ざける。

世渡り上手なやり方と言えば、上司への不満、怒りを我慢して己をイエスマンにしなければならない。

逆に上司の機嫌を損なえば、当たり前のように文句の雨が降ってくる。そうなれば余計身も心もいつかは耐えられずに果ててしまう。

嫌々上司と社会の規則を守り、精神的に追詰められた奴は心の拠り所を探すか、圧力の発散、或いは同情されるのを待っている。

だったら可哀想な子羊を慰めるのもメイドの役割。

とりあえず揉め合いをしている彼らを見無視して建物の周りを調べる。中も勿論調べるがそれは後にする。

調べている間に男の仲間にも発見されてしまったらどうしようも無い訳ではないが、少々面倒なことになってしまう。

時間を止めてまたもゆっくりじっくりと観察させてもらうことに

した。

建物の周りを調べてわかったことが二つある。

一つ目は、建物自体は木造で、建材はまさかの建築材料に不向き
の『シナノキ』だったということ。

二つ目は、至る所が老朽化していて、強い衝撃を与えれば建物が
半壊してしまうということ。

建物自体は大きな倉と変りない点からして、勝手に改築して住め
るようにしたただけだとも見れた。

（さて…次は建物の中身を…と言いたいところだけでも…建物が倉
だから入るところは門一つしか無いのよね…。窓はあるけど無理や
りこじ開ければ見つかってしまう…かといって時間が止まっている
今、ドアは開けられないどころか全てのものに私が干渉することは
できない）

時間が停止した場合、咲夜が触れていないものは全て空間に固定
されてしまう。固定された物体は傷をつけることも移動させること
も叶わない。

物理法則での時間停止とはそういうことなのだ。

悩みに悩んだ末、時間停止を解除。

結局男が出てくるのを黙って待つという策しか残らなかった。

光学迷彩を起動して侵入するという手もあるが、足音等の不安点
があつたために却下。

メイドにとって動かない事は一種の苦痛である。

長年こき使われて働くことを生き甲斐としているメイドが突然何

もない部屋に放り込まれたらどうなるだろうか。可能性は高くないが大体は発狂すると思う。

環境は違えど何も無いということが今の咲夜にとってはかなりの重圧だった。

(私は：お嬢様の命令が無ければ殆ど無能のようね……。紅魔館に居た時の休憩している間は、お嬢様以外の誰かの世話をしたり本を読んだりもした。でも：此処には何も無い……。どうしようかしら……)

案外自分は寂しがり屋なのかもしれない。そう思いかけた時だった。

「ああ！！咲夜じゃん！っはあ……。やっと見つけたぞーもうー」
「にとり！？どうしてここに来たの！？それに…その、ナイフ…」

思いも寄らない人物が目の前に現れた。

それは私の命の恩人である心優しき人間の友、河童だった。

「いやあー私ってさ、エンジニアじゃん？それでさー、作ったものを人里で売ってるんだよねーあっはははー…」

背中に背負っている大きなバックの中身は恐らくその売り物だと見た。

にとりが続けるように口を開く。

「それとハイこれ。アンタのだし返すよ…」

そう言つと、手に持っていた銀のナイフが装填されたホルスターを渡す。

「ありがとう。手間を掛けさせてしまったようね。それじゃ、ハイ。これは貴方のでしょうか？」

「ああ、そうだったそうだった！うーん……………」

切断用途なのかどうかは全く検討がつかない工具を返そうと差し出したが、突然考え込んでしまったにとり。

「……………それさ、一応切断工具を基本理念にして開発したものなんだけど…ね。完成したは良かったんだけど使ってみたらみたでスゴイことになつてて…」

「どうされたのでしょうか？結構いいものでしたよ？切れ味が」

「えっ！使ったの！？……………うん、まあそうなんだよなー、切れ味が良すぎなんだよなー。鉄パイプごと作業台真つ二つにしちやうぐらいだぜ？」

「ああ、そういうことでしたか」

切れ味は男の脅しの際に使い、大いに役立ったから覚えている。

「そんで、紅魔館のメイドがなんでこんなとこに…？」

「あ、それは…あまり言いたくはなかったのですが…ええー…。貴方ですので言いますけど」

どんなに小さな嘘や大きな嘘を吐いたとしてもいずれば分かっってしまう。知られるからではなく、自分で言わなければいけない場面に必ず遭遇してしまう時が来るから。

嘘がバレるのは疑う人が居て、尚且つ自分が悪事を働いた時。

自分で言わなければいけない時は、大抵自分が弱い時だ。

後々面倒事になってしまふことを恐れる人は自分から先に言う。嘘でなくとも隠し事だつて一緒だろう。

咲夜は隠していた事情の一切をにとりに話した。

途中、男が出てくるかと警戒したがまだボスに叱咤されているようだった。

どんな言い訳をしているんだろうか…。

咲夜の話聞いたにとりはある程度理解したようで、素直に驚いた。

「ええええー！？紅魔館を…解雇された…だと？主人ですら咲夜を溺愛するほどのに！？」

「……ですから突然理由もなしに解雇を通知されたことに納得ができませんいわけで、今まさに理由を探している最中なのです…。あと、あんまり大声出さないでください。奴らに気づかれたら困りますので…」

「ああ、ごめん…つい興奮しちゃって…。それにしてもスカーレットファミリーかよ、確かソイツらってさー、元々安土桃山時代のお偉いさん達専属の馬廻り衆だった人達の子孫集団だったって聞いたけど」

『馬廻り衆』

それは戦国時代から続くとされる、大将の身边護衛を担う精鋭部隊であると言われている。基本的な人員構成は一般人などの農民ではなく豪族、つまり武家などの高地位の人間だけで編成されている精鋭部隊と言えよう。

しかも、安土桃山時代の馬廻り衆で有名な部隊ならば織田信長のが最強と謳われている。

もし彼らの子孫であればこの一連の件は一種の占領であり、紅魔館への見えない闇取引でもある。

「なぜそのような者たちが…その、あの…『スカーレットファミリ

「『などという言葉を…?』」

「ああ、そつちを気にするか。んー…それは、シラネ。格好良かったんでない? まったく金持ちのボンボンは何を考えるか分かったもんじゃないからねー」

「して、それ程の財力を有しているのですか?」

「うーん…そうなんじゃないかな? それなりの裏社会は形成しているみたい、鬼と天狗ほどではないけど。…でも、かなり頭のキレた集団だって聞いたよ」

直に体験しているからそれは重々承知している。

「というか、アンタならチャツチャと片付けられるじゃん…吸血鬼パワーでとつとと追い返して元通りじゃないの?」

「相手の戦力が不明のまま無闇に仕掛けたら返り討ちにされてしまいかもしれないわよ? それに、私は吸血鬼じゃないわ。骨の髄まで立派な人間よ」

「…その返事を返すあたり、もうすでに立派じゃないと思うんだけどー」

差し当たり問題解決の道は回りくどい地道な作業しか残されていなかった。確実にこちらの動きを読まれているのであれば、逆に読まれていないような行動を取ればいいだけの話。

例えば、正々堂々と交渉しに行くとか。大胆な行動ほど敵の度肝を抜ける。

相手がどのくらいの勢力を持っているか、どれほど先を越されているかを把握しなければならぬ。それを考慮した上で反撃。

反撃の基本は『観察』から『不意打ち』ということ。

「その話は置いておきましょう…あまり長く話していても行動を起

こさない限り意味はないですし…なにより、にとりさんには関係のないこと…これは私だけの問題なのです」

立ち上がると、にとりがじっと咲夜の顔を見つめる。

「んー…言われてみれば確かにそうだけどさ。んー…つかさ。どつかで少し休まないかな？」

と言いながら直後に口をニンマリと歪ませ、

「…それとも、話を戻してさ。私たちで手を組んでヤツちまいましたよ。どうか、大将？」

「あなた…何を言っ ツ」

更に割るように、

「ここで出会ったのも何かの縁だよ盟友！困ってる人間には河童の手助けってねッ！」

世の中には思いも寄らない出来事が普通に起きたりする。

それほど仲良くしていたわけでもない奴とみよんな事からお互い知り合って最高のパートナーになったり。そのパートナーがまさかの凄惨な奴だったりなんて良くあること。

狭い視野の中で生きていた人間にとっては確かに思いも寄らない事だが、広い視野を持っている奴だったらどうだろうか。チャンスと言わんばかりに喜ばはらずだ。

「オーケイ、大体わかった。さっさと事を済ませて出てくれば良いって事だね?」

バッグの中身を整理しながら応えた。

「そうね。殆どはあなた任せにするけど、くれぐれも行き過ぎた言動を取らないように気をつけて」

「まっかせーなさーい!扉が開いたら後は全部アドリブだけど、そこら辺は細心の注意を払うようにするってさ!ってか行き過ぎた言動って何よ」

少し不安が心残りしていたが、失敗しても今までの作戦をバックアップできるように内容を組んであるから問題ない。失敗してもそれを上回る大事を持っていけばいい。

「できるだけ早く済まして頂戴ね。男が出てくる前には終わらせて欲しいの」

「分かりましたって!まあ刮目してなって…:このにとり様のビジネス術を!」

作戦の内容はにとりが先ほど言っていたガラクタ販売。それを利用した屋内侵入だった。

彼らは普段何をしているか、これから何をしようかと企んでいるかを調査するための捜査ということ。

言うのは簡単で端的だが、実際にやってみると尋常じゃなく難易度が高い。

まず、玄関から入るにはそれなのに対人交渉術が必要になるし、上手く切り抜けたとしても屋内に案内されるのかは人によっては千差万別。

仮に入れたとして、屋内に入った目的が水道の修理工事だったら案内されるのは勿論水が出る厠、洗面台のどちらかだけだ。他のものに手を出したり目をつけたりしている暇はない。

ならば家の屋内を徘徊できて、尚且つ手出しができたり聞き耳建てたり出来るような理由を導き出さなければならぬ。

そうなれば、口に出す理由はいくらでもある。その中で一番定番だとされているのが空調設備工と建築物強度査定員のこの二つ。

「すみませーん、誰かいらっしやいますでしょーか？」

扉を叩くや否やさっそくにとりは行動を開始。

「はいはい、どちらさまでしょう？おや、これはこれは機械好きの河童様ではございませんか、どうなされましたか」

「いやいや、お忙しそうなところすみませんねえ。建物の修理に来まして」

奥から出てきたのは誰かの家来らしく、高貴そうな整った衣装を着ていた。

にとりを疑う素振り無く、常連かお得意様という感じで接していた。

「あー、お待ちください河童様：修理というようなご予約は存じませんが：？」

「いやはやー：ご勝手ながらすみません。偶然ここを通つたら老朽化している部分が目に留まりました、道具販売ついでにと………駄目ですかい？」

「あ、いいえ、とんでもございません！修繕してくれるのでしたら有難いです。なにしろ薄い壁一枚の倉ですから至る所が剥がれてしまつて…。それで、今回は何をお売りに？」

バッグを下ろし、手を中に物を探る。

そして取り出したのは、楕円形で縁には対称に五、六本の細いスリットがある箱のようなものだった。

「これです…。」

「はて、これは？」

「実際に見ないとわかりませんが、その為には中に入れさせてもらえないかな？できれば埃っぽい部屋でお願いいたしやす。」

「……いいですよ、どうぞこちらへ。玄関で話すのもなんですしね、ゆっくりと見聞きさせてもらいますよ。」

潜入開始だ。

玄関を上がると、ここからではもうにとりの姿は見えなくなる。

あとは適当な情報をつかんで帰還することを待つだけ。

(喋り方はどうにかならないのかしらね…)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7525x/>

[東方] 解雇通知 ~元メイドの逆襲~

2011年10月20日02時10分発行